



今回の設定んだけど、ラフカディオ・ハーンの話ではあるんだけど、生まれてすぐに、まず、毛細血管の磁力で稼働するナノ・マシンがみんなに埋め込まれる訳です。この世界では。微弱な電流で十分に動くナノ・ネットワーク・コンピューターの端末が、もう、義務として全員に埋め込まれていて、それが社会の決定的なインフラになってる。水道みたいな当たり前な感じで。で、そのバイオ・コンピューターへの入力装置として、口の中の喉の形と、舌による歯のタッチの読み取りと、それプラス何個かの任意の爪の圧力変化によって、かなりダイレクトにメディアに言葉を打ち込めるシステムが成立している、と。思ったことを、口の中のかたちと舌の移動だけで、さっと文字として入力できる、そんなテクノロジーが作られてもう50年とか経ってるわけ。そんなだけのテクノロジーがあるんだから、当然メイン・モニターも網膜にダイレクトにプロジェクションされていて、生きている人は基本的に起きているあいだは、生の視覚と、中央からネット配信されてくるインフォメーションをずっと二重写しに見ながら暮らしているのが常識。視覚の隅にずっとナノ・コンのステータスとか、現在位置の情報とかが出て、あと、目の前にあるモノとか人とかのデータも、舌と歯を使った検索によってリアル・タイムで目の中にすぐ呼び出せるわけ。外を歩いているけど、ずっとホストからデータが入ってきて、しかも全員が基本的に完全に情報オープンで、自分で設定しなおして、あえて遮断しなければ、自分の名前とか住所とかが普通に相手の視覚のなかに表示されるようになってる。こう、自分の身体の横にフキダンみたいのが出て、そこに個人情報ポップアップされるのね、街のみんなの。情報の収集と開示が徹底されていて、だから、これまで会ったことのない人でも、データベースにかならずその人のこれまでの履歴があるから、逆にね、必要以上に警戒しないで付き合えるっていうね。そういった社会のなかにあって、主人公は障害者っていうか、耳なしホイイチだから、バイオ・スクリーンが生まれたときから弱くて、網膜にネットからのデータを投射することが出来ない。普通にモノは見えるんだけど、そこにデータを重ねて処理するってことが出来ないっていう設定で、これはもう、この世界にあってはかなりの障害ね。すべての社会的事象がモノ+データっていう状態で視覚的に完璧に連動して動いていて、そのなかにあってデータが見えないっていうのは、ほとんどリアルに目が見えないのと一緒なぐらい、この社会は高度にネットワーク化されているわけ。極端に言うと、インフォメーションを携帯しなくてはコンビニに行くのも危険で、なので、主人公は外に出るときにはかならず、携帯用の半透明な液晶モニターを持って、そのモニターにデータを表示させながら行動することになる。あと、相手のモニターにも自分のデータを表示させなくちゃならないんで、何度もホストと接続・最適化しなおして、実際の視覚と、液晶に映されるインフォメーションを二重写しにして、読み落としているデータがないかどうか心配しながら、おそるおそる街を歩いてゆく、というわけです。